

# 「防災は四位一体」

時々刻々と変化する気象。私たちが日々何気なく生活している東北地方は四季折々豊かな自然に恵まれたところですが、自然は時として猛威を振ります。「天災は忘れた頃にやってくる」とは、明治生まれの物理学者寺田寅彦の言ですが、近年、一歩外へ目を向けると天災は忘れる間もなく、どこにでもやって来ます。

また、災害報道の際に決まって耳にするのは「今まで何十年もここに住んでいるが、このようなのは経験がない」あるいは「自分のところは大丈夫と思った」という声です。地球温暖化が叫ばれる中、局地的な豪雨など極端に激しい現象の発生頻度は確実に高まっていると言えます。

こうした状況は、岩手県においても決して例外ではありません。昨年8月には、大型で強い台風第10号が観測史上初めて本県に上陸し、沿岸を中心に1時間に80ミリの猛烈な雨が降り、総降水量は多い所で約300ミリに達しました。

この記録的な大雨により、岩泉町のグループホームには一気に濁流が押し寄せ、入居者全員の尊い人命が奪われ、県内で死者・行方不明者23名、4300棟以上の住

宅が被災するなど各地で甚大な被害が発生したことは記憶に新しいところです。

また、平成25年8月9日にも雫石町や紫波町を中心に1時間に70ミリを超える猛烈な雨が局地的に降り、土砂災害などにより多数の尊い人命が奪われました。

このように、岩手県内でも近年雨の降り方が「局地化」「集中化」「激甚化」して来ており、新たなステージに入ったものと認識せざるを得ません。

気象台では常に24時間気象を監視し、随時防災気象情報を発表しますが、これらの情報を受ける住民の皆さんが活用して避難に役立てていただき初めて意味の成すものと考えています。

こうした防災気象情報が有効に活用されるためには、気象台の周知・広報といった自助努力は無論のこと、防災関係機関、報道機関、住民がお互いの役割分担を認識した上で相互に協力関係を確立して初めて成し得る業とも言えます。

今、改めて「防災とは、国、地方公共団体、報道機関、そして住民とが四位一体となっ

て取り組む共同作業である」ことを認識し、平常時にこそこうした活動の基礎となる顔の見える関係の構築に努めなくてはならないと思うのです。

現在、防災対応のトリガーとなる気象情報を発信する気象台では、住民の避難行動に資するため、平成29年度の出水期を目前にわかりやすくきめ細かな情報提供に向けて改善を行っているところです。

こうした新たな防災気象情報が効果的に活用されるためにも、すべての人々が普段から防災に対する意識を高めておく必要があります。

そのためにも、痛ましい犠牲が残した教訓を生かす取組みを地域を挙げて進めていくことが重要です。

防災は、自らを守る自助、自主防災組織や地域団体などの共助、国、県や市町村などが支援する公助と、それぞれが相互扶助のもとに成り立っておりますが、「自らの命は自らが守るという意識こそ、防災の原点である」ということを決して忘れてはなりません。



盛岡地方気象台長

和田 幸一郎